



# 恵まれた自然の中で暮らせる幸せ

裾野市長(静岡県) 大橋俊二  
Syunji Ohashi

## はつめこ

富士山、愛鷹山、箱根連山に囲まれ、眼下に駿河湾を望み、今もなお自然を残す黄瀬川が市内の中央を穏やかに流れるまち、それがわが裾野市です。

私は約40年前、「先生、ここで開業しなさいよ」という多くの人々の温かい言葉に支えられ、医者としてこのまちを永住の地と決めました。高度経済成長に伴って押し寄せた都市化の波にもめげず、古い日本の素朴な心の優しさを残すこのまちに私はほれたのです。

市長室の窓には孤高を保ち屹立する霊峰富士が間近に迫り、その威風堂々としたさまは見上げるたびに私を奮い立たせます。

なだらかに広がるすそ野のすべてを包み込む優しさに、こんな富士山が大好きだとあらためて感銘を受けます。世界自然遺産の認定も間近かと感じ入るところです。

## 親を失うことの重み

趣味というものも特に持たない私にとって、たまに公務から離れ、居間で家内とゆつたりとお茶を飲む。それが数少ないプライベートタイムといえるかもしれません。

そんなとき、胸に去来するのは、人の

だからといって、私は、この人生を恨んでいるわけでもなければ、悲観していいわけでもなく、ましてや後悔などしていません。私が言いたいのは、親を失った子が単にかわいそうだということではなく、どんな逆境にあっても、くじけてはいけないということです。

## 座右の銘「持続への挑戦」はすなわち努力

人間生まれるときも一人、死ぬときも一人とよく言います。医師という職業柄、産声を上げたばかりの赤ちゃんから、お年寄りの臨終まで接してきました。

開業以来、24時間365日体制で診療を続けてきました。私が市長になってからも、病院職員の努力によってこの体制は変わりません。長年の医師としての経験でいえるのは、子どもの病気は待ってくれないということです。休日でも深夜でも、患者は「急患です」とやってくる。

実際は重症でない場合も多いのですが、それは医者が診たからこそ分かることで、親にとってわが子の体



生死と人生とのかかわりです。

私は、幼いころに母を失いました。そのため、私は兄と二人で母の実家に引き取られました。しかも戦中、戦後の日本が最も大変なときに。

母がいない寂しさは、筆舌に尽くし難いものがあります。

申し訳ないとは思いますが、親の代わりになって育ててくれた人が、どれだけ

の変調はすべて深刻です。夜中に起こされても「重症ではないのに」などと腹を立てず、「ただの風邪でよかったなあ」と喜ぶことになりました。

無論、昼も夜もない緊張した日々を過ごすのは、精神的にも肉体的にも楽ではありません。

自分の家族にも大きな犠牲を強いてきました。それでも続けることができたのは、人の生死にかかわる医師という職業に、何物にも替え難い感激や喜びがあるからです。

私は、自分で言うのもおこがましいのですが、いつも目標に向かって精いっぱい努力をしてきました。努力すれば夢はかなうと信じてきました。人間、最善の努力をすれば悔いは残らないのではないのでしょうか。才能には底があっても、努力には底がない。どんな夢でもいい、その夢をかなえることこそ人生の目標ではないのでしょうか。

道は間違いないどこかに開いています。人を思いやる優しい心を持って、悔いのない人生を送りたいものです。

## 野の草を思いやる心

さて、エコツーリズムなどにより自然環境への関心が高まる中、富士山静岡空港が本年6月に開港します。観光面で裾野市にとって追い風となり得るでしょう。多くの観光客に来ていただき、市の繁栄

深い愛情で接してくれても、その寂しさは埋められるものではありません。それは、これほど経済的に発展し、当時と比べものにならないほど恵まれている現代でも同じでしょう。

確かに生まれたばかりの赤ちゃんは皆平等です。そして、希望に満ちています。しかし、平等であったはずの赤ちゃんが、千差万別の生活環境で育つ過程で、人格、能力に大きな違いを生じてしまうのです。

幼くして親を亡くした子は、心の寂しさとともに、社会的にも大きなハンディを負って生きていかざるを得ないのです。

しかし、親を失うことの重みをどう説明しても、両親のそろった家庭に育った私の家内にはあまり理解されないようです。「そんな年になって、まだ」と家内は言いますが、自分の子どもが成人した年になってまで、昔の寂しさや苦勞を思い出すことがあるのです。

を図ることも市長の職務です。しかし、この地を愛する者にとって、気掛かりでならないことがあります。それは、心無い植物の乱伐です。

コケモモ、オニクはすっかり見られなくなりました。かつて市内のあちこちにあったアシタカツツジの群生は現在、保護区に指定された場所にしかありません。ウドやタラの芽は根こそぎ採られ、美しい花を咲かすクマガイソウ、アツモリソウもめっきり減ってしまいました。

忙しい今は訪れる暇もありませんが、富士山には「御殿庭」と呼ばれる場所があります。灌木の樹相の不思議な優しさ、荘厳さは、神か仙人のすみかと思わせ、その気高さは足を踏み入れることさえはばかられます。

大自然との触れ合いの素晴らしさは、確かに多くの人たちに味わってほしいと思います。そんな素直な気持ちさえ卑小に感じるほど、ここだけはそつとしておきたいというのが私の偽らざる気持ちです。

そもそも自然保護とは、自分の心の故郷を守ることにほかならないのではないのでしょうか。その人々の心が、とげとげしい世相に荒らされず、優しさを保って生きていけるよう守っていくことも、医師として、また、市長としての私に課せられた任務だと感じる毎日です。